

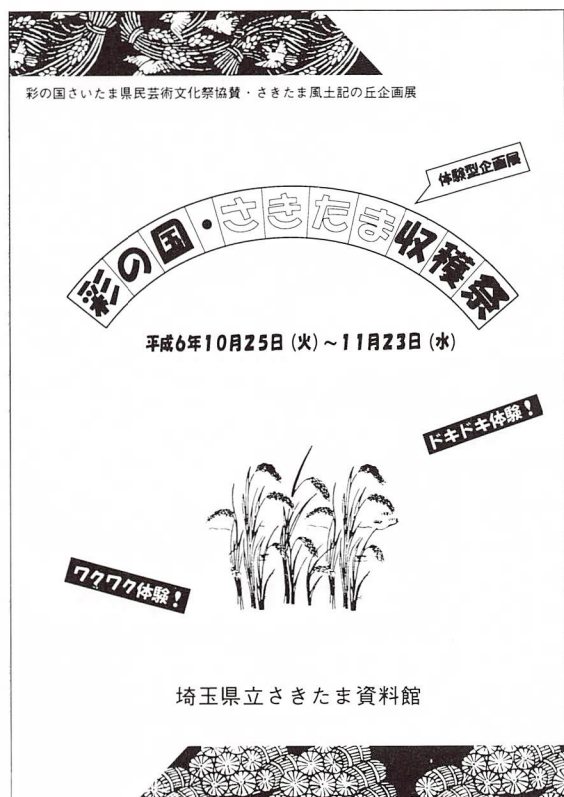
「体験型企画展」開催の試み

田中裕子

1 開催にあたって

当館では、昨年の秋に企画展「彩の国・さきたま収穫祭」を開催した。これは、従来の展示によって構成する企画展ではなく、県民に積極的に参加してもらって体験学習中心の「体験型企画展」である。近年、「自分でなんでも経験してみたい」という一般県民からの希望が高まってきていることをうけて、これまでも、各博物館施設では体験学習を多く取り入れた事業を実施してきている。しかし、会期中毎日体験学習を連続して行う企画展というのは、おそらく今回が初めての試みであろう。テーマは、このところ何かと話題の「米」の収穫作業に関するものにした。米騒動に明け暮れた昨年とはうってかわって、今年は豊作となったが、この2年間で米そのものに対する関心はかなり高まったのではないだろうか。

現代の収穫作業を昔と比べれば、刈り取りから袋詰めまで機械の力を借りて手早くこなすことができる。かつては、稲刈り・籾すり・脱穀などの収穫作業で秋は忙しい毎日が続いたものだという。その当時使用されていた農具が、当館で所蔵している「北武蔵の農具」である。



リーフレット表紙

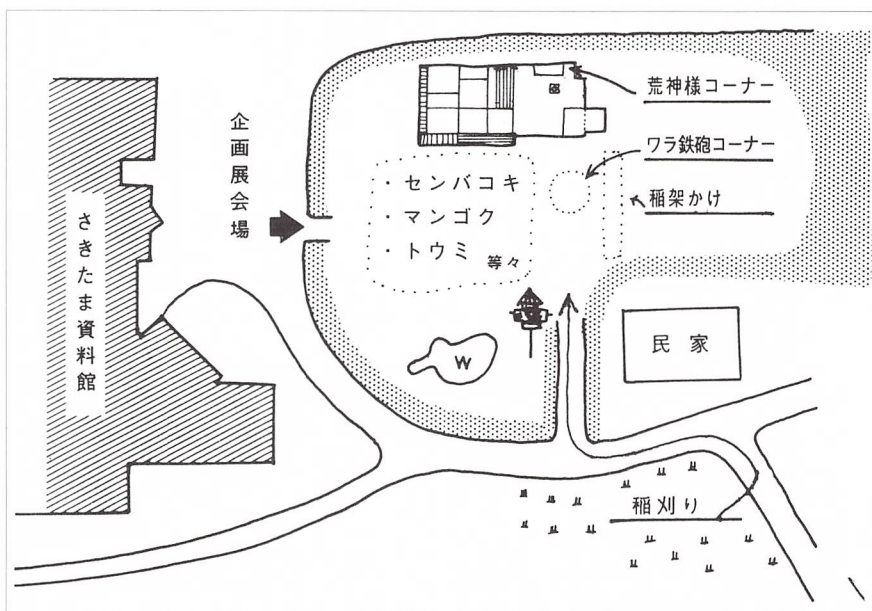
この「北武蔵の農具」は、水田用具や畑作用具を体系的に収集したコレクションで、1640点で一括して国の重要有形民俗文化財に指定されているものである。こうした貴重な資料を長く保存し、後世に残していくことが博物館施設の大切な役割のひとつであるが、ただ保存するだけではなかなか文化財に対する理解は得られないものである。こんなときは、普及活動用に収集した登録外の資料を活用して「北武蔵の農具」に対する理解をさらに深めてもらうことも有意義であろう。

そこで、今回の企画展では、機械化が進むにつれて消滅していった農作業を体験することによって、私たちの主食であり騒動の中心となった「米」がどのような作業を経て食卓に並ぶのか、実体験を通して理解してもらい、あわせて当館の収蔵資料についても理解を深めてもらおうという企画で開催を試みたわけである。

2 どのような体験学習を実施したのか

この企画展の会期は、平成6年10月25日（火）から11月23日（水）であった。この30日間で、休館日4日間を除く26日間すべてで、なんらかの体験学習を連日行い、^{あずきがゆ}稲刈りや小豆粥を食べる会は期日を決めて特定の日に実施した。雨天のため屋外の体験学習を終日中止にせざるをえなかったのは、2日間だけであった。

会場は、当館の敷地内にある移築民家旧遠藤家とした。同家屋は、傷みもあり座敷内に人を上がらせることができないので、デイは縁側からの利用とした。使用したのは、デイ、板の間、土間、シタザシキ、庭である。いわゆる展示室などを会場にするのとは違って、農具を並べた民家は、



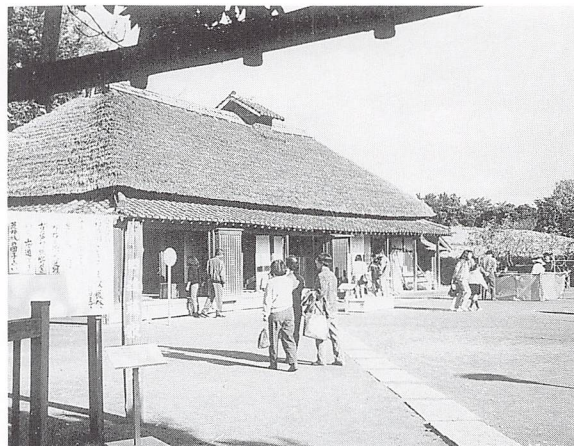
企画展会場略図

独特の雰囲気醸し出し、本来の生活臭さを取り戻したようで生き生きとしてきた。

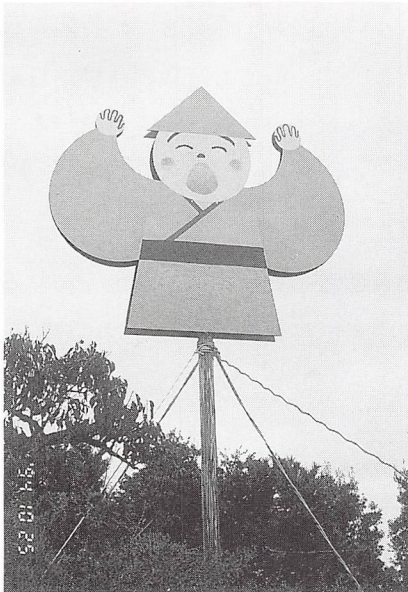
さらに、会場の入り口付近の垣根には開催を知らせる横断幕を張り、庭にデザイン化したディスプレイ用の^{かかし}案山子を立て、各コーナーを表示するパネル、^{はさ}稲架などを作った。稲架には、事前に刈り取った稲を架けておいたので、ディスプレイ効果はさらに高まった。屋内は暗がり部分が多いのでライティングをし、パネル等を多く展示することで、人が入りやすい空間となるように努めた。こうして、準備が整った民家は「収穫祭」らしい賑わいを感じさせるものがあった。



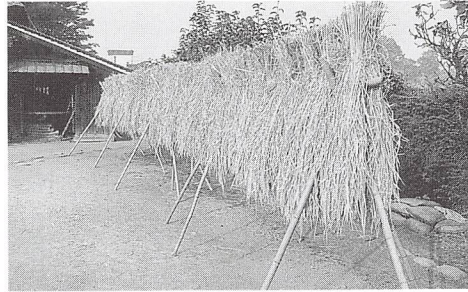
開催を知らせる横断幕



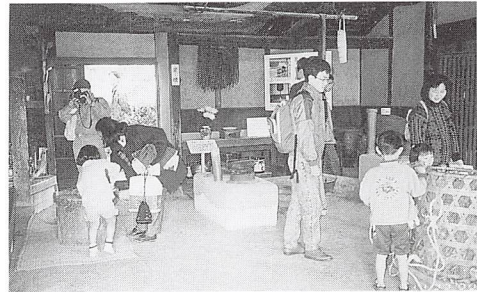
会場となった旧遠藤家



ディスプレイ用案山子



稲架



民家内土間の様子

実施した作業は、以下のとおりである。日程は表1に示した。しかし、この日程はあくまで予定であり、その日の天候等によって実施項目が変更になるので、毎朝会場入り口に設置した掲示板に「今日の体験学習」を明示しておいた。

いろいろな農作業を体験しよう

- 1 鎌を使った稲刈り
- 2 千歯扱き・足踏み脱穀機を使った脱穀
- 3 粃干し
- 4 唐箕を使った選別
- 5 万石どおしを使った選別
- 6 大師講の小豆粥を食べる
- 7 一升瓶や一升杓・斗桶を使っての計量
- 8 ショイカゴを背負う
- 9 こうじんさま 荒神様の団子占い
- 10 藁打ち・縄ない
- 11 野良着の着用
- 12 とおかんや 十日夜の藁鉄砲叩き
- 13 粃殻にさわる
- 14 藁山で遊ぶ



会場入口の掲示板

*収穫のすべての工程が体験できればよかったが、唐臼は使用できる資料の該当がなく、この工程はやむなく省くことにした。

農作業の大部分は、屋外で行うものだが、今回の企画展では、雨天時のことを考慮して屋内で行えるものも加えて充実させた。それらは、一升瓶などを使った計量コーナーや荒神様の団子占い・藁打ち・縄ないなどである。こうすることで、屋外での体験学習が中止になっても、来館者が屋内でなんらかの作業を体験できるように配慮したのである。

体験学習への参加は自由で、事前申込みなどは行わなかった。というのも、もともと、特定の日に人数を制限して行う体験学習（例えば稲刈り）が少なかったことや、いつでも複数の体験項目を用意していたので、とくに申込みを受ける必要がなかったのである。事前申込みは、人の整理をしやすい反面、当日事業を知らずに会場に訪れた人を受け付けられないという排除性も持ち合わせている。こういうことがないように、会場に来た人は、だれでも気軽に参加できるようにした。

基本的には、会館時間中会場を開放しているわけだが、平日の入館者の大部分は、遠足で訪れる小学生たちであるため、連日10:00から15:00くらいまでの間に集中して事業を行った。それ以降は、脱穀した粃米を藁などから選り分ける作業や農具類を土間に収納する作業等の時間にあてた。

〈体験学習の日程〉		文化の日	第二土曜	県民の日	勤労感謝の日						
		10/25 (火)	30 (日)	11/1 (火)	3 (木)	6 (日)	12 (土)	13 (日)	14 (月)	20 (日)	23 (水)
期間限定の事業 (雨天延期あり)			稲刈り (第1回)	稲刈り (第2回)							
			稲架かけ	稲架かけ							
		センバ	コキ・足踏み脱穀機を使った脱穀作業								
		粃干し			粃干し						
								唐箕を使った選別			
毎日実施する事業 (休館日除く)	雨天も実施			斗櫛や	斗桶で計量してみよう						
					ショイカゴを背負ってみる						
				野良着を着てみよう							
				荒神様の	団子占いコーナー						
						ワラウチ・縄ない					
	雨天中止				十日夜のワラデッポウ	叩き					
						ワラ山で遊ぼう					
					粃穀で遊ぼう						

3 個々の学習の記録

1 〈鎌を使った稲刈り〉

鎌を使って稲を刈る感触を体験してもらい、小規模ながら収穫の苦労と喜びを体験してもらう。

稲刈りには、回ごとに30人ほどの参加者があった。ふつうのハガマと稲刈り専用のノコギリガマの切れ味の違いを試してもらう。本来の作業量は「1人で1日1反」である。その2/10の面積を30人でかかったのだから、計算上は、本来の1/150の作業量ということか。前日の雨で田がぬかっていたのでドロドロになりながら、お米はこうして刈り取るのかという感動も新たに、「面白い」「疲れた」という声が交互に聞かれた。刈り取りの後は、束ねる方法を学習する。刈り取りは、ザクッザクッと小気味良い音を立てて軽快だが、束ねるのには参加者一同てこずったようである。それでも藁でギュッと締め付けるコツを覚えると段々に手際が良くなってきた。稲束を満載したりヤカー

は、子どもたちが喜んで引いてくれた。会場へ戻り、稲架かけまでやってもらう。一段落して、米を収穫する苦勞が少しはわかってもらえたかと思っているところに、稲束を振り回している子が現われる。本当の学習には、なかなかかなりえないようである。

今回は、稲刈り自体の体験とは別に、普段入ったことの無い水田に足を踏み入れる感動、切り株を踏む感触もまた思いがけない良い経験だったようだ。また、子どもたちはそこかしこで跳ねるカエル捕りに興じた。



稲刈りを楽しむ家族連れ

2 〈千歯扱き・足踏み脱穀機を使った脱穀〉

稲からどうやって粃米の粒を取るのか、この脱穀作業を千歯扱きと足踏み脱穀機（ガーコン）を使って体験してもらう。

子どもたちは、稲に米がなる（？）ことは漠然と知っていても、実物を見たことが無いので脱穀に対する具体的な知識が無かったようだ。

ガーコンは、動き始めるとその音が人を引き付けてくれる。子どもたちは、最初尻込みしがちであるが、働きかけると喜んで参加する。遠足の場合、クラスを代表して何人かに体験してもらう。ペダルを踏んで「ガーコン、ガーコン」という音がしだすまで、周囲はじっと見守り、脱穀が始まるとワーッと歓声上がる。勢いよく飛んでくる粃米を帽子で受けとめたり大喜びである。

そこで、脱穀した粃米を渡して「その中にみんなが食べているお米が入っているんだよ。」と教え



ガーコンを使った脱穀

てあげると、驚いてその場で殻を剥いて中の米を確かめてみる子がたくさんいた。

センバコキは、ガーコンのように大きな音がしないし、大東では脱穀しにくいので小束にするため迫力がないので、ガーコンほど人気がなかった。それでも、パラパラッと米粒が脱穀されると感嘆の声が上がり、使用方法は理解してもらえたものと思う。



センバコキを使った脱穀

3 〈粃干し〉

脱穀した後の粃米^{ししろ}を筵に広げて、天日に当てて干す作業を体験してもらう。

粃干しは、粃を小判形に広げるのが難しくまた地味な作業なので、積極的に参加する人が少なかった。ホシモノヒロゲという道具自体も知られていないので関心の度合いも今ひとつであった。

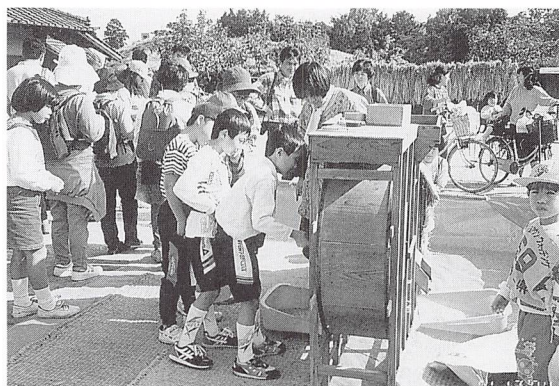
4 〈唐箕を使った選別〉

風力によって玄米と粃殻等を選別する作業を体験してもらう。

唐箕は、残存率も高くよく見かけるせいか「知られている農具」のひとつといえよう。だが、使用方法は、ほとんどの人が知らなかったようだ。

学習に際しては、まず風を起こす機構を紹介し、そのあとで玄米と粃殻の混ざった状態のものを見せ、この粃殻を風で吹き飛ばすことを説明した上で、実際に選別を行う。簡単な仕組みであるのにゴミ等などが選別できるのを見て、こどもたちは一様に驚いていた。「すごい」「面白い」「よく考えついたなあ」などの感想が聞かれた。

体験方法は^{とって}把手を回すだけなので、多人数でも簡単に実施できるが、自分の目の届かないところに粃殻が飛んでいるので、その分自分で選別しているのだという実感が脱穀作業の時ほどなかったようだ。しかし、自分が手を休めてしまうと、選別が滞ることは実感し、白い米粒になるまでの苦労の一端を知ってもらえたようだ。唐箕を体験してから粃殻を触ると効果的であった。



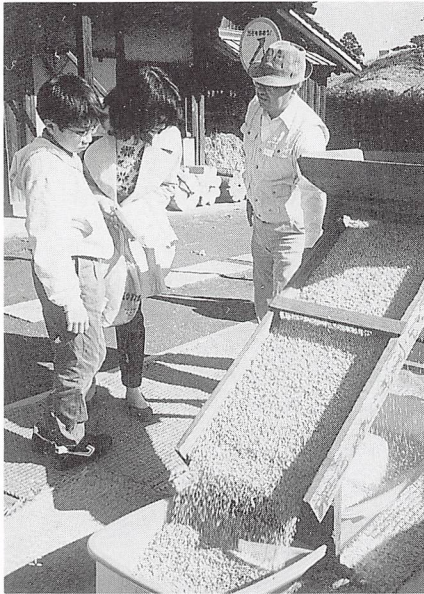
唐箕を使った選別

5 〈万石どおしを使った選別〉

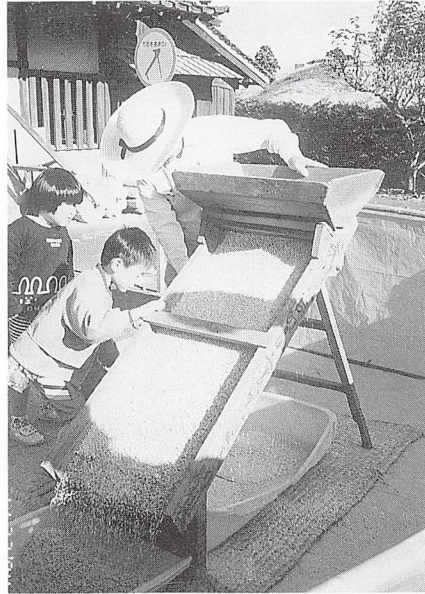
万石どおしの斜面を使って、玄米と粃米等を選別する作業を体験してもらう。

万石どおしも、滑り台のような形をしているので展示室等でも良く目につく農具といえよう。

玄米と粃米の混ざったものを漏斗状の口^{ろうと}にいれて、止め木を外すと、茶色と白色の混濁した穀物が網目上をザーッと滑り落ちて、みるみるうちに選別されていく。粃米は殻があって少し大きいた



万石どおしの選別



同 左

めに下まで滑り落ちるか網の上に留まるかし、玄米だけが網の目をくぐりぬけて落下するからである。

この作業を体験してもらい、単純な仕組みで、当時としては効率良く選別が行われてきたことや、白い米粒になるまでの苦労を実感してもらった。この作業は見るのも初めてだ

という人が大部分で、大きな反響があった。とくに、穀物が一気に滑り落ちる時に歓声が上がった。唐箕の場合と同様に、選別作業の大変さがその一端でも理解してもらえたのではないだろうか。

6 〈大師講の小豆粥を食べる〉

大師講の儀礼食である小豆粥を食べてもらおう。

大師講は、旧暦の11月の4のつく日に行われる予祝行事である。現在の11月14日では暦が異なるので現密には期日が違うのだが、この日が埼玉県民の日にあたっていることもあって実施した。企画展全体の構成をみても、収穫を願った食を伴う行事を会期中に紹介したかったからである。

当日は悪天候もあって、11時頃まで会場にはほとんど来館者がいなかったのだが、お粥を配り始めるとどこからともなく人が集まり、5合の粥は15分ほどで無くなってしまった。「食」に対する執着心をみる思いであった。結局、100人以上の人が小豆粥を食した。

粥と一緒に「稲の花を吹き飛ばすことになるので、どんなに粥が熱くても吹いて食べてはいけない」との本来のいわれを記したリーフレットを配ったが、思いのほか気温が低く、お粥が冷めてしまった。熱々の粥が用意できなかったのは残念であった。(粥は担当者が炊いた)

「小豆が入っているのに塩味なのに驚いた。」



小豆粥を食べる

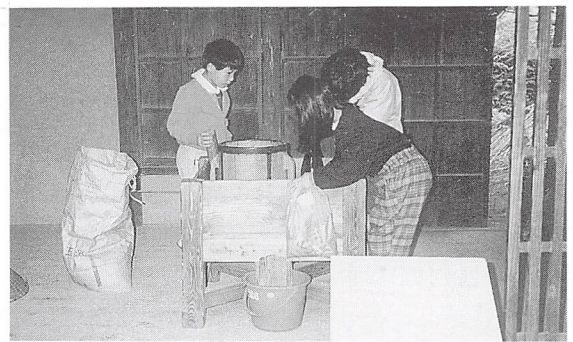
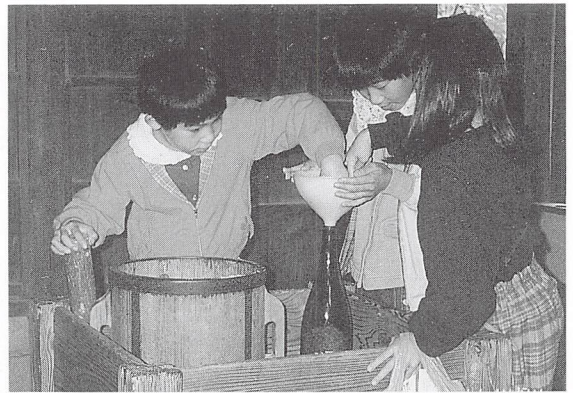
「昔、食べたことがあるので懐かしい。」「おいしい。」と好評であった。「小正月の小豆粥を思い出した。」という方もいて、懐かしい味覚の体験学習となった。

7 〈一升瓶や一升樽・斗桶を使っの計量〉

一升の10倍が一斗であることや、「すりきりいっぱい」の計量方法を屑米を使って体験してもらう。

瓶と樽は、容積が同じでも見た目に違いがあるようで、1升瓶よりも1升樽の方がたくさん入るのではないかという意見が多かった。そこで、実際に計量を行ってみて同量であることを確認させた。地味ではあるが、実験気分での体験学習ができている。グループで取り組む場合が多かった。

屑米をさわってザーッと計ったりこぼしたりできるコーナーは、石臼の台を利用したので、下のバケツに溢して取ることもでき、砂遊び感覚で幼児に大人気であった。長時間、ここから離れずに飽きることなく楽しんでいた。その際、屑米とはいえ粗末に扱わないように留意した。

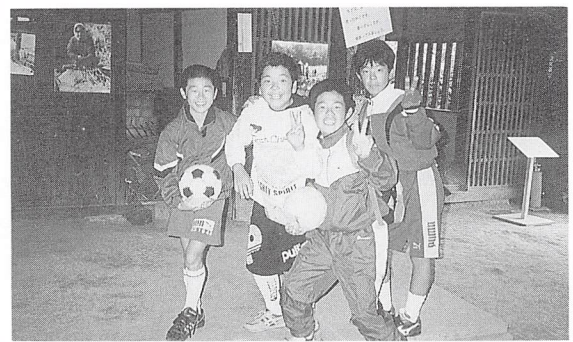


こどもに人気の計量コーナー

8 〈ショイカゴを背負う〉

桑の葉の運搬用に使用された大型のかごの背負い方を体験してもらう。

土間の中央に置いたせいか、次々と気軽に背負う姿がみられた。中に、稲束をいれて重量感を持たせたので意外と重く、背負うのにコツが必要だったようだ。収穫物と運搬の必然性について話す機会とした。



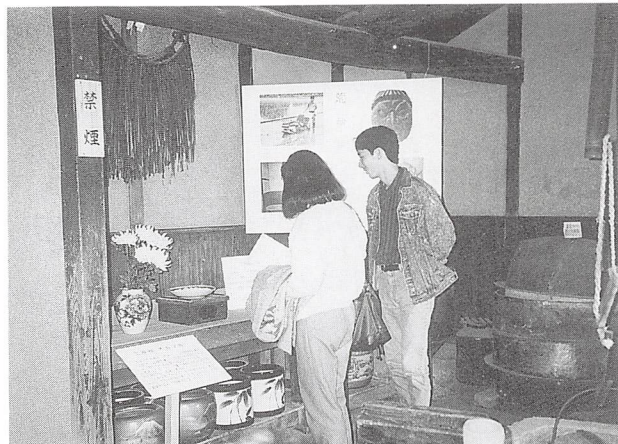
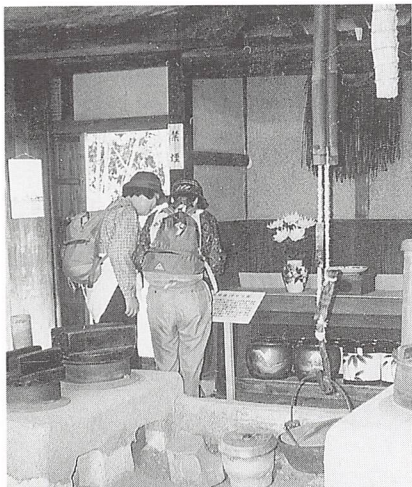
気軽にカゴを背負う

9 〈荒神様の団子占い〉

カマドの神様で作神としての性格を持つ荒神様を紹介した。

ちょうどこの時期に、荒神様が縁談話のため出雲に出かけることを紹介し、これが作物だけでなく子孫繁栄の願いを込めたものであることも示した。団子占いとは、実際の行事の際に団子が転がった方角に良縁があるという事例をもとにディスプレイ用の団子を用意したものである。会場では、実際に頭上に団子を載せて転がす人もみうけられた。「神無月に出雲に行くのは知らなかった。」「縁談と関係があるのは知らなかった。」等多くの人にかまどの神様に対する認識を広められた。

カマドと荒神様



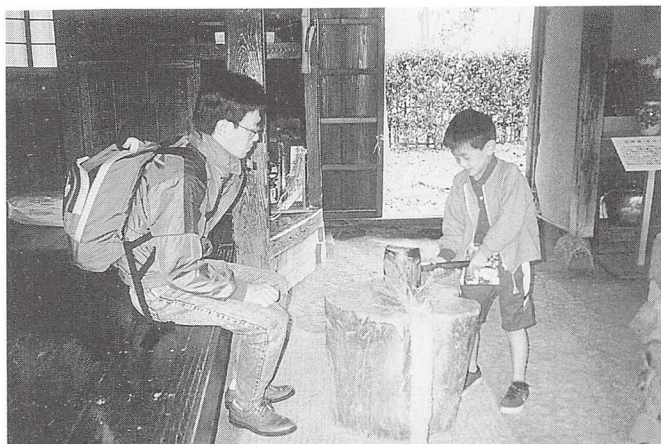
荒神様の団子占いコーナー

10 〈藁打ち・縄ない〉

藁を打ち、縄をなう作業を体験してもらおう。

藁は、さまざまな身の回りの用品を作り上げる素材であった。これは、冬の農閑期の作業であるが、縄をなうという基本的で単純な技術を多くの人に知ってもらおうと取り上げた。

藁打ちの体験学習では持続性がなく、叩いた藁で縄をなう人は少なかったが、家族連れなどがグループで楽しむ姿が多く見られた。



藁打ちに挑戦

晴天であれば、体験学習の主役は脱穀などであるが、雨天の場合も、縄ないや計量コーナーに人気が集まった。縄をなうということは、自分の手を擦りあわせるだけで、藁が縄に変わっていく。この時の感触とスピードが魅力なのかも知れない。

11 〈野良着の着用〉

野良着を着て、農作業時の服装を体験してもらおう。

予想では「野良着は古くさい」とこどもたちには敬遠されると思っていたが、意外と希望者が多かった。学校の中で1人の生徒が着てみると次々に手が伸びて可愛い支度ができあがった。初めのきっかけが大切で、時間をかけて着用すると楽しめるようだ。服の上から着ても良いという簡便さも功を奏した。記念写真を撮っている学校もあり、「あったかい」「その気になれる」「このまま学校に通いたい」等の感想が聞かれた。



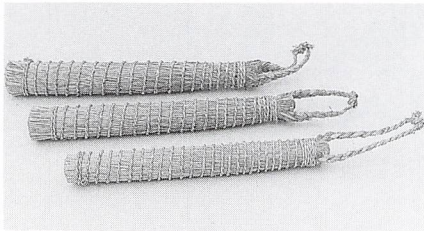
野良着姿でポーズ

大人で着てみる人は少なかったが、手に取って^か緋の味わいなどを手の感触で確かめていた。現代でも緋は斬新なデザインとして充分受け入れられるという感を強くした。

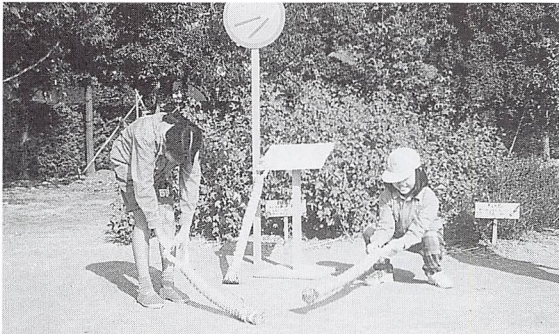
12 〈十日夜の藁鉄砲叩き〉

旧暦10月10日に行う十日夜の行事を紹介し、藁鉄砲で地面を叩く壮快さを体験してもらう。

予め、十日夜の囃子唄を新たに録音して準備し、会期中会場で流した。やはり、音が人を引き寄せる効果は大きいようである。



当初は、こどもたち5人ほどが輪になって藁鉄砲を叩いてくれることを期待していたが、叩き方が下手な上に扱いが乱暴なので、揃うより前に藁鉄砲自体が壊滅状態となっていました。本来は一晩だけの行事なので壊れても仕方がないが、



藁鉄砲とこどもたち

自分たちで作ったものではないので愛着心がなく粗雑に扱うことになったのではないだろうか。反対に60～70才代の方は、藁鉄砲を懐かしそうに抱えて見る人が多かった。それだけに叩き方も堂にいったもので、何人かで昔を思い出して叩き合いを楽しんでいた。「懐かしい。」という声が圧倒的で「スカッとする。」という感想も聞かれた。

13 〈籾殻にさわる〉

玄米を包んでいた籾殻の感触を体験してもらう。

かつては梱包用の詰物材等として利用されていた籾殻も、今は知っている子がほとんどいない。そこで、大型の木箱に籾殻を入れてその感触を楽しんでもらった。籾殻はチクチクして気嫌いされると思ったが、意外と「柔らかくて気持ちいい。」「あたたかい。」という感想が多かった。持ち帰りたいという子もたくさんいた。こどもの興味をそそろうと籾殻の中にスーパーボールをしのばせてみたが、団体の場合激しい争奪戦になるので、その後ボールをプレゼントする対象を幼児に絞った。そのためこのコーナーも幼児に大人気となった。近くに住むこどもは会期中何度も繰り返し遊びに来



籾殻にさわってみる



同 左

てくれた。たとえスーパーボールが目当てであったとしても何度も来てくれることは主催者として嬉しいことである。当初、糞殻を触ることでアレルギーを起すこどもがいるのではないかと心配したが、注意を呼びかける掲示板を用意したためか、幸いにもそうした事態にはならなかった。

14 〈藁山で遊ぶ〉

今のこどもは、藁を知らない。そこで藁東で山を作り自由な遊びを体験してもらおう。

はじめは、小屋や山を作るなどの遊びを期待していたが、大体のこどもは藁で叩き合いをするだけであった。そんな中で、藁山に座りこんで縄ないを始める人がいて、その年配の人を中心にこどもが集まり、やがて自然発生的に30人程が縄ない・草履作り・藁人形作りを始めた。藁山に恐々と寝転んでいたこどもたちも藁の感触を楽しんでいた。

「体験学習」も構えのないこうした「遊び」の空間も大切だと感じた。



藁山で遊ぶこどもたち

4 実施上の問題点と工夫点

今回の企画展では、収穫作業を作業ごとに分けて、会期を通していろいろな工程を体験できるようにした。これは、作業を指導する係員の不足から同時にいくつもの体験学習を組めなかったことと、100人以上の団体が一斉に会場に入ることが多いので、その注意をなるべく集中させたかったからである。このような理由から、一連の収穫作業を1日のうちにすべて体験できるとか、各工程を連動させることがなかなかできなかった。連動は唐箕と万石どおしの工程だけにとどまり、また唐臼の作業を実施できなかったことも残念であった。

「どうやって糞殻をとるのか」「その時どんな農具を使うのか」疑問を持つ人が多数いたので、こうした場合、リーフレットを参照してもらい、さらに館内で唐臼の実物資料を見てもらうように勧

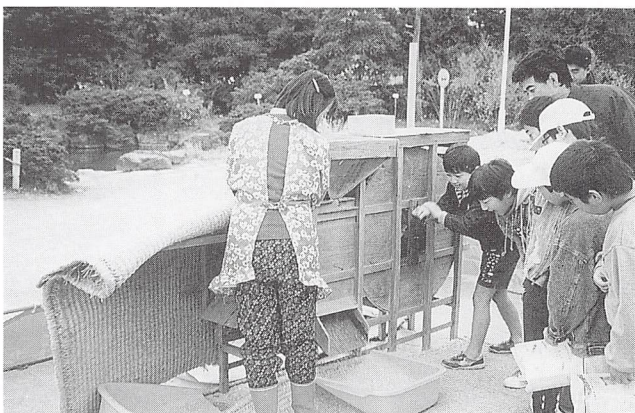
めた。こうすることで、図らずも民俗展示室と会場を結び付けることができたように思う。

つぎに、農具を動かすためには穀物（米）を用意しておく必要があった。そこで、当館近くの農家に協力してもらい、収穫できるまでになった稲を2畝分譲ってもらうことにした。この豊富な稲のおかげで、稲刈りも体験でき、その後の農作業も順調に実施することができたのである。ただし、稲刈り・稲架かけ・脱穀・粃干しまでは、工程通りであるが前述したように唐臼を使った工程が体験できなかったため、その後の唐箕や万石どおしの工程では半ば精米した米と粃殻を混ぜるなどして専用のブレンド米を用意して使用した。そのうえで、何十年も放置されていた農具を正しく動くように調整した。極力傷みの少ない資料を選んだが、長期間の使用に果して堪えられるかどうか。今回は未登録の資料を使用したため、保存していくべき博物館資料をどこまで活用して良いものか、今後の課題である。

また、体験学習中心ということで、事故のないように留意した。稲刈り用の鎌の刃の切っ先を予めテープで貼ったり、脱穀作業でガーコンに手を引き込まれることのないように特に注意を払った。かといって危険を理由に体験者を限定することはなく、能力に合わせて体験を楽しんでもらえるよう心掛けた。加減ができるというのも、手作業ならではの利点であろう。

さらに、親しみやすい雰囲気を作るために、担当の係員は自ら野良着姿で事業に臨んだ。「収穫祭」のコンパニオン(?)である。もんぺは活動しやすく保温力も優れているので快適であったが、学芸員らしさは欠如していたかもしれない。また、看板よりもアピール度の高い横断幕を張って会場を示したり、掲示板には毎日実施する事業を掲示するなどの工夫をした。無料配布したりフレットには、稲刈りから精米までの工程をイラストをまじえて紹介し、なるべく平易な文章で読みやすい記述を心掛けた。

最後に、会場を屋外にしたことでは、天候が悪い場合には来館者が減少するだけでなく、事業そのものにも影響がでてしまうということがあった。例えば、晴天であっても強風の日には穀物が飛散するので、事業を中断せざるを得なかった。こういうことを考慮すると、屋内の方がコンスタントに事業を実施しやすいといえよう。しかし、今回の企画展にふさわしい雰囲気を整えたり、存分に穀物を広げられる等の点では屋外会場に利点がある。実際のところ、屋外の体験学習を終日中止にしたのは2日間だけであり、「天気まかせ」でもそれなりに楽しむことができたといえるかもしれない。



係員がついて指導をする

5 むすびとして

体験型企画展を終了して強く感じたことは、「百聞は一見に如かず」どころではなく、「見る」だけよりも「体験する」ことの学習効果が非常に大きいということである。このことを今さらながら改めて感じた。先生の中には、「体験はこどもたちにとっても楽しみであり、毎年このような事業があるといいのだが。」という意見の人もいたが、なによりも「資料館の中で、民家が一番楽しかった。」と屈託の無い笑顔で話してくれた小学生の言葉を嬉しく受けとめた。

一般の方々からも、一連の収穫作業・各工程の手順等についてたくさんの質問を受けた。そのときに近くに農業経験者がいれば、その経験談に耳を傾けて楽しんだ。こうしたことで、地域による作業の違いや伝承の違いが明らかになって驚く人も多く、「ウチのほうではこうだった。」「ウチのほうではこうしたもんだ。」と話が弾んで、有意義な空間を作ることができたようだ。当初は、まったく農作業の経験の無い人を対象として想定していた企画であったが、かつて農業に従事していた人をも取り込んで、多くの人に良い体験をする機会を提供できたと思う。

私自身にとっても今回初めて体験する農作業がほとんどで、担当者として多くの貴重な体験をすることができた。各農具の仕組みに感心させられることはもとより、ことに稲刈りや選別作業の大変さは身にしみてわかったことである。やはり、学芸員にとっても「体験」は大切なことであった。農具の形だけを継承するのではなく、体験したことを活かして先人の工夫や知恵等を伝えていきたいものである。また、体験学習だからといって大上段に構える必要はないのだということも痛切に感じた。野良着を着たり、糶殻に触ったり、単純なものでも取組み方で十分な学習効果を上げることができるのである。

つぎに強く感じたのは、民家や稲架・農具類を見て「懐かしい」という人が本当に大勢いるということである。「懐かしい思い出」があるのは、自らの作業体験で苦勞をしたからこそであろう。長い年月を経ても憶えているのは、電子機械とは違う、人力による道具や機械仕掛けのなせる業であろうか。現在の農作業の飛躍的な進歩は望ましいものだが、果してコンバインの収穫作業を懐かしく思う時代が来るのだろうか。「辛い作業だったから、もうやりたくない。」という人もいたなかで、「懐かしい思い出」については考えさせられた。

博物館でも民俗部門には、生きた思い出がまだまだ封じ込められているのだ。でも、こういう民俗資料を懐かしいと感じない世代がどんどん増えていることも事実である。時が過ぎていくなかで、「人の想い」をどういう風に継承していったらよいのだろうか。

もうひとつ強く感じたのは学校対応からである。遠足で訪れた学校の中には、事前に情報を得て体験学習を楽しみに来てくれる人もあったが、なかには「体験学習」にまったく関心を示さない先生が少なからずいたことには驚かされた。反応がないのである。先生が興味を示すと生徒もそれにつられるように次々と体験学習を始めるものだ。また、参加するこどもたちも、多くは無言で農具の前に立ち、体験を済ませるとさっさと無言で去っていく。先生方にも同様の傾向は見られた。お礼を強要するつもりはないが、事業に参加する側にも最低限のマナーを求めても良いであろう。

こういうふうに、反応がなかったり無言で生活することは、日頃の習慣になっているのかもしれ

ない。今、学校ではパソコンを使った授業も行われていると聞く。博物館施設でもAV機器を取り入れて、ボタンひとつ操作するだけで自分の希望通りのビデオや資料を検索できるシステムもできつつある。何事も機械と向き合っただけでこなせるので、言葉は不要なのである。

が、私はこういった傾向に疑問を持つ。安易に機器に頼りすぎるのは誤りではないだろうか。仮に新館オープンの際に先端技術を導入しても、それは数年後には「時代遅れ」になる代物である。常に新しいシステムに代替していく用意があるのなら、また、それらの保守点検に十分な時間と予算をかけられるのなら、それもまた良いのかもしれないが、現状ではそこまでとても手が回らずに、やむなく「故障中」の札を下げて、手をこまねいている場合が多いのではないかと。博物館に調べたいものがあったのなら、学芸員に相談してアドバイスをうけたうえで自分で学習するとか、こうした人間的なやりとりが大切なのではないだろうか。確かに、人員の問題や、窓口立つとトラブルもあって面倒な点も多いが、人が互いに話しをすることが何にもまして大切な学習なのではないだろうか。新しい技術を導入するばかりが進歩ではない。人が人として伸びていくことが進歩だと思うのである。無言で扱えるオートシステムを採用するかたわら「挨拶道路」を作っていることに矛盾は無いのか。こんな疑問を持つのである。

博物館は「古き良きもの」を残すだけでなく、「古き良き社会」というか、こうした「人としての営み」を残していく場所であっても良いと思う。目新しいシステムに振り回されること無く、博物館らしいシステムを継承していくことが、これから求められるのではないだろうか。

今回の企画展では、参加者の声を本当に身近に感じることができた。私自身、これまでに何度か企画展等を担当してきているが、大抵の場合、展示会がオープンしてしまうとその会場にはなかなかいられないものである。せいぜい展示解説や案内・見回りをする程度で、最終日を迎えてしまうことが多い。今回は会期中専ら会場にいられたので、それだけに来館者と関わることもでき、反応も良くわかった。これは、私にとって大きな「収穫」であった。

最後に、私が会期の直前に不覚にも骨折するというアクシデントに見舞われ、左手の固定を余儀なくされた。そのため担当者として作業を十分に実演することができず、口惜しいかぎりである。しかしその間、粉骨砕身惜しみ無い協力してくれた、金子保雄さん・香川清美さん・飯塚光生さんには、本当に心から深く感謝している。とくに金子さんには、農業経験者の立場から、農作業をひとつずつ丁寧に指導していただいたり、藁鉄砲を作っていたり本当に何から何までお世話になった。厚くお礼申し上げる次第である。

この他以下の方々からもあたたかい御協力をいただいた。ここに、感謝の意を表するものである。

〈協力者〉

大沢 久雄さん、大沢伊津子さん（行田市）

青木 清さん（騎西町）

吉田としえさん（川本町）